

## 戦後社会運動史資料論 鈴木茂三郎(2)

鈴木 徹三

---

はじめに

- 1 「ニワトリからアヒル」へ
- 2 国会証言録
- 3 日本社会党創立期(以上, 517号)
- 4 民主人民戦線の提唱と「山川新党」

山川均の民主人民戦線の提唱

社会主義政治経済研究所と「山川新党」(以上, 本号)

### 4 民主人民戦線の提唱と「山川新党」

#### 山川均の民主人民戦線の提唱

この問題については、大原の『雑誌』442号, 443号(95.9.10.)「日本社会党と鈴木茂三郎(2)(3)」に『産別民同』と『山川新党』と小題をつけて書いた。いささかつけ加えたい。

山川均は45(昭和20)年9月14日に上京し、先ず新聞を持ちたいと考えて『民衆新聞』に参加した。しかし、日本社会党の創立について、鈴木が山川に相談した形跡は見当たらない。山川もその『自伝』で「社会党のできる過程において話を受けもせず、ノータッチなんです」と述べている。その結成過程については、荒畑寒村、小堀甚二などから聞いた程度であり、具体的な過程はよく知らなかったようである。

山川の『自伝』には、戦前「労農派の人たち」と全評などが労農無産協議会、日無党を組織したと述べ、その是非について何も言及しておらず、物足りない。それはともかく、敗戦後、「鈴木君は、出てきても何もできない、しばらく静観せよという意見でした」そうだが、鈴木との間に戦前の「しこり」が多少残っていたのだろうか。

山川は、戦後の政党計画は、無産政党の復活というよりも、はるかにひかえめな自由主義的な進歩的な政党をつくらうということだったらしい。ところが思いもよらぬ民主化政策だったから、急に元気づき、がらりと変わった社会党樹立の計画になったらしい、と『自伝』で回顧した。小堀あたりの情報によったものであろう。

周知のように、山川は46年1月10日に民主人民戦線の即時結成を提唱し、大きな波紋を投げかけた。旧労農派系からは荒畑、小堀、渡辺文太郎、足立克明らがこの計画に参加した。

後に「山川新党」は「小堀新党」だった、といわれたように、小堀の影響が強かった。45年12月28日付の鈴木あての小堀書簡は、敗戦後における小堀の考えを示すものであり、参考までに紹介しておこう。鈴木に残した資料で山川の名が戦後登場するのは、これが初めてである。

「今日荒畑さんを訪れ、大兄から荒畑さん宛の手紙を見せて貰いました。ちよつとばかり失敬な事が書いてありましたね。呵々

(一) 天皇制問題に触れるのは損だといふ大兄の意見には同意しかねます。 大衆のタブー的天皇崇拜はむろん知ってゐますが、だからこそ一層吾々が之を高唱し、大衆を教育しなければならぬと思います 大衆追従主義には反対です。

(二) この所僕が支部組織に熱心でないのは、焼け跡の多い豊島区に来て会った三人の旧日本無産党員は社会党にも共産党にも熱意を持たざる情勢であり、一方社会党入党の意ある新人はみんな市会区会の議員を覗ってゐる者ばかりです。それでは無意味なので組合組織に専念してゐます

(三) 荒畑氏の党本部立候補公認にはどうか一肌脱いで頂き度く懇願します 氏に適当なポストを作るといふ友誼上の問題だけではなく、日本無産階級運動の早急を要する編成替へ上に絶対に必要だと確信します

(四) 若し党本部が荒畑氏を公認しない場合には、非公認で除名覚悟の上立候補といふことになりませう。荒畑氏を始め僕もその他の諸兄も除名覚悟です。金は僕が身ぐるみ脱いで一万円作り、あとは寄付に待ちます。三千円の寄付は既に受けました。

(五) 僕が山花君と同道して大兄を訪問しなかった理由は、荒畑氏の立候補について一番気乗薄なのは大兄自身だろうといふ意見があつたので、それでは僕が行っても無意味なばかりでなく、お互ひに気まづさが増すばかりなので

要するに吾々の立場はこのままで行けばヨーロッパの中央派化する危険あり、ここの所緊禪一番を要すると信じます。明日山川さんと会ふことになってゐるので、充分話し合い度いと思ひます。荒畑氏の公認の件、どうかよろしく願ひます

十二月八日

小堀甚二

鈴木 茂三郎 様」

いかにも小堀らしい書簡である。足立、渡辺、荒畑、小堀らがしばしば会合を開いていたことを窺い知ることができる。ただ、鈴木が荒畑の立候補に反対したという話は聞いたことがなく、翌年の選挙で荒畑は当選して議員となった。もっとも、結党直後の混乱をおそれ、鈴木は青年部の若手に誰それは戦犯だとやたらにレッテルをはらないように注意していた。荒畑や小堀らが同志社をつくり、追放すべき社会党幹部のリストを公表する動きを苦々しく思ったことは、容易に想像できる。だが、もし小堀のいうようなことがあれば、荒畑十八番の「絶交状」を鈴木にたたきつけた筈である。『寒村自伝』には、党幹部は容易に自分を公認せず、自分を推した加藤勤十が右派に殴られて怪我をした挿話を紹介しているだけである。当時は加藤・鈴木と称された仲であり、両者の意見が異

なっていたとも考えられない。

山川の民主人民戦線の提唱は時期尚早であり、社会党はまだ一回も中央委員会を開いておらず、主体性を欠いたものだと言われ、鈴木は批判した。共産党は、一枚岩とはいえないが、それなりに一応まとまっていた。共産党の徳田球一らは、相も変わらぬ社会ファシズム論を唱え、社会党の実力者西尾末広ら執行部の多くは、山川の提唱に反対だった（3.8.社会党常任中執臨時会議で「山川氏提唱人民戦線に対する不参加回答」決定）。

3月10日、民主人民戦線の世話人会を開いた。社会党は常任委員が個人として参加することを禁止し、水谷、松本治一郎、黒田寿男らも個人として参加できなかった。総同盟、日農も断ってきた。4月3日、民主人民連盟が結成された。

このような情勢下に、鈴木は「山川さんが最後の仕事」というので、出来るだけこれに協力した。だが、4月7日に幣原内閣打倒大会が開かれ、複雑な党内をとにかく纏め党代表として出席した鈴木に対して、荒畑議長の制止も聞かず、徳田はその矛先を社会党非難へ向けた。「鈴茂なんてあんなずるい奴はぎゅっと言わせねば」といきまき、なかなか説得されなかった。やがて「水に流す」と徳田独特の変わり身の早さをみせた。しかし、この日の徳田らの行動は、人民戦線運動に水をさすものだった。しかも、4月10日に総選挙を控え、社、共の溝は深まらざるを得なかった。

拙論で述べたように、7日の大会に関して、三戸信人氏は次のように解説した。山川の提唱に呼応する野坂参三路線は、共産党内部において有力であり、正面からこれを潰すことはできなかった。そこで徳田は、伊藤律、長谷川浩らとともに先ず党外部で野坂を叩き壊す作戦をとった。長く日本を離れていた野坂には、どこか気の弱い所があり、次第に徳田に圧されていった、と（95年談）。あるいは、野坂は後に暴露された疑惑をかかえ、「どこか弱かった」のかもしれない。

5月26日、社会党は救国民衆連盟を決定した。鈴木私案に基づく左派案、社会党、共産党、協同党三党で連盟を基本的に構成する案は否決され、これに対抗する右派の森戸案が可決された。共産党は当然これに加わらなかった。しかし、民主人民連盟準備会に加入していた人々の大部分は、総選挙後、社会党に加入した。山川の構想は、より広汎なものだったが、西尾、徳田ら社共両党の反対により挫折した。

しかも、この運動を提唱した山川は4月初旬胃癌に倒れ、2ヶ年下曾我に病臥せざるを得なくなった。民主人民戦線運動にとっても不幸なことであった。

当時における鈴木の本音を知る資料として、46年7月2日付の私あての書簡がある。『月刊社会党』79・11号で公表したが、あまりこの雑誌は読まれていないようなので、改めて紹介しておこう。当時、私は復員・京大復学後、社会科学研究会へ入っていた。当時、私の友人の学生諸君の多くは日本青年共産同盟（共青）へ加入していた。西尾らの支配する社会党よりは、共産党の方が青年の心をとらえやすかったからである。

労農派を自認していた私は共青へ入る気は少しもなかったが、何度かお誘いがあった。そのことに関する鈴木の返書である。

「このほどから、安定本部の長官の問題で有沢（広巳）君と度々会った。断ることを協議したわけだ。有沢君に、君の、このあいだの手紙のことについて話をしたら 共青に入ってくれといわれて考えているということ そこを頑張らなくては、としきりにいっていた。これは、私

も同感だ。

一、共産党とその原理たる共産主義、つまりマルクス・レーニン主義は、マルクス・カウツキー主義とともに、世界的に批判されつつあり、マルクス主義に還れ もう一度マルクス主義にかえって、そこから客観情勢に適応した運動方法をたてること といわれている今日、学生は、あくまでも、原理の探究に進むべきであろう（有沢君は、〔徹三から〕独占についての参考資料に関する照会の手紙をもらったが、その際、僕は、学生時代は、なるべく、学理の研究に専念するようすすめておいた、ということだった、これは、私も全く同感）

二、とりわけ日本の共産党は、一応、発展の限界にある これは社会党の今後の動向と関連することではあるが それは、ともかくとするも、現在の（1）徳田君即ち代々木天皇の独裁制が打破されなくてはならぬ、（2）あの『愛されない』戦術が、清算されなくてはならぬ、（3）特に、指導原理が未だに明確でない、（4）ソビエットとの関係 これが最も重大で、アメリカ治下における運動としては、米・ソ国交上のことを考慮において、米・ソのいずれからも、できるだけ、中立でなければならぬ。そうでないと、日本の将来に、不幸と不利を招くことがあるうかとおもう。以上は私見のみ〔以下、個人的な部分は省略〕 鈴木茂三郎」

この書簡で、鈴木が当時考えていたことはよく理解できる。

「マルクスに還れ」は鈴木の本論だった。敗戦直後、カウツキーに興味を抱いたようだが、あまり研究する余裕はなかった。マルクス・レーニン主義をそのまま日本へ輸入することに抵抗感を覚えた。といって、もともと系統的な理論研究を重ねて社会主義者になった人間ではなく、書記長、委員長など劇職のために勉学の時間がとれなかった。晩年、ようやく解放された時には老いが迫ってきた。それにしても、マルクス・レーニン主義のみならず、グラムシにも興味を抱いたのは、長年の実践運動から体得したのであろう。

第二に、すでにこの時点において、共産党は實質上、徳田の独裁下にあると判断し、その戦術に不信の念を強めていたことである。まだ、指導原理を打ち出せないほど共産党は混乱していた。

第三に、早くから中立を唱えていたが、本書簡でさらに明確にその立場を明らかにしている。

### 社会主義政治経済研究所と「山川新党」

他方、鈴木は社会党創立直後の46年1月25日、社会主義政治経済研究所を設立した。創立当初は、共産党の野坂を役員候補とし、同党からも良心的な学者の参加を予定していた。しかし、松本健二ら秘密党員を除き、共産党はこれに参加しなかった。

その後、短期間に目まぐるしく歴史は変わる。47年の2・1ゼネスト禁止、片山哲を首相とする社会党連立内閣の成立、同内閣の辞任と芦田内閣の誕生、予算案をめぐる左派内部対立、黒田寿男ら労農党結成、昭和電工事件などによる芦田、西尾らの逮捕、吉田内閣成立、総選挙の惨敗と鈴木書記長の実現、西尾、鍋山貞親をバックとする独立青年同盟事件、短期間にわたる党の第一次分裂と統一。

社会党の第一次分裂に際して、小堀らは分裂の永続化を策して、伊藤好道、岡田宗司らが怒鳴りこんだ、と聞いている。

47年7月、山川は社会党の足柄下支部へ入党した<sup>(4)</sup>。胃癌の治療が終わり、藤沢の実家に戻ったのは翌48年春のことである。入党したものの、47年7月の「覚書」では、日本社会党と全く異なる新党をつくるべきか、社会党を基礎とすべきか、山川は迷い続けた。

他方、社会党左派の牙城として大きな役割を果たした社会主義政治経済研究所の歴史的使命も終わりに近づきつつあった。鈴木が党の政務調査会長に選ばれてからは、研究所が政調会へ引っ越したような形になった。芦田内閣の予算をめぐる左派の分裂により、木村福八郎ら有力な論客を失った。それでも、機関誌『社会主義』は曲がりなりにも刊行を続けたが、伊藤好道編集『社会主義政経週報』は47年10月に僅か2回しか出せなかった。代わって改題『週刊社会主義』が11月に刊行されたが、週刊どころか3回発行しただけで、48年2月1日号(通算40号)以降休刊に追いこまれた。常時研究所にいるのは布施 絢一、田中嵩、高本光雄、清水信子にすぎず、もはや限界だった。

同年5月1日、機関紙『政経通信』41号が刊行された。しかし、それまでの機関紙とは性格を一変し、主幹のポストに山川がついた。44号(6月1日)からは、表紙に「山川均・鈴木茂三郎責任編集」と特筆した。その発行所も板垣書店に変わった。前年8月に山川グループが雑誌『前進』を刊行した出版社である。その時、向坂逸郎氏は機関紙の顧問を辞任し『前進』に加わった。研究所そのものは相変わらず篠塚ビルにおかれ、伊藤、布施らの努力によって機関誌『社会主義』だけは何とか発行し続けた。

何故そうだったか。布施、広沢氏らは、おそらく「山川新党」がからんでいたのではないかと推測した。

48年2月13日、突如、産別民同が結成された。産別本部では細谷松太(産別前事務局次長)、産別書記の三戸信人、大谷徹太郎、単産側から光村甚助、喜田康二らが参加し、細谷がその理論的指導者だった。三戸氏によると、鈴木は勿論、高野、伊藤、大橋静市その他誰にも話さず、秘密裡に行った電撃作戦だった。若し、共産党にもれば一挙に潰される恐れがあったからである、と。

産別民同は、山川らの期待に反して「山川新党」に反対だった。反対に、研究所とは極めて仲がよかった。三戸は研究所の大橋と戦時中より親しく、それ以前からしばしば研究所を訪れた。大橋は社会党の青年部員に社会主義理論を教えていた。木原実が大橋に言われて産別民同を訪れてからは、青年部左派30名と公然と行動できるようになった、と細谷は語った。三戸だけではなく、産別民同の中心である細谷、大谷、柏原実らは研究所をしばしば訪れるようになった。小堀らは、産別民同と親しい研究所に興味を持ったのではないかと推測した。また、青年部のみならず、彼らのよく知らない社会党左派勢力(戦後派が多くなった)と親しい「鈴木を利用」しようとしたのではないかと(布施氏)とも言われる。その間の経緯については、何回も書かされたので省略する。

細谷と鈴木は戦前から親しかったのではなかったか、と広沢氏は推測した。鈴木木の『国会証言録』では、戦後知り合ったと述べている。三戸氏の証言どおり2・1スト前の「全国労組共闘委員会」

---

(4) 三戸氏は、山川氏とは議員会館で一度会った程度である。「新党」の話ではなく、ワイマール時代の労働運動について聞きたい、ということだった。かなり話してから、フランスの労働運動についても説明した。しかし、フランスについては、ほとんど関心を示さなかった、そうである(99年頃)。

頃とみるべきだろう<sup>(5)</sup>。

『国会証言録』には、産別民同の運動のために資金が要る。当時は紙不足で政府の統制品であり、その管理を担当していた水谷商工大臣から約20万円ほどの紙を分けてもらい、それを闇で売って資金に提供した。その情報を聞いた共産党の徳田は「あの鈴木にそんな器用なことが出来るものか」と信じなかった、という。

以上のように、大原社研編『政経通信』の「解題」を書いてきたが、何故、急に板垣書店が引き受け、山川・鈴木責任編集とうたったのか。山川は何故手をひき、8月1日号（49号）、これが最終号となったが、急遽伊藤が編集にあたらなければならなかったか、釈然としなかった。

鈴木は「複写便箋」をよく使った。「聴き取り」をお願いする前に気づくべきだったが、次に紹介する「便箋」を見落したのは手抜きだった。

以下の書簡は、鈴木あての板垣の「速達書留」（昭和23年8月）を複写し、山川へ送ったものである。

「君は非常に多忙のようだが、僕の方でも別段、自己の利益のために会合を開くわけではない。とにかく君の所へ連絡をとる度毎に不愉快な思いをする。この次から連絡係は御免こうむりたい。

会合の日取は二十七日午後五時（時間はこちらの指定）と決定した。出欠は勿論自由だ。

八月二十四日 板垣武男

（二十五日朝「速達書留」受領）」

この複写を同封し、8月26日、山川宛に次の書簡を送った。これまた、記録のために複写をとっている。

「 山川均様

鈴木茂三郎

八月廿六日、

(5) 大原『雑誌』442号、95.9、24ページで山川は9月15日に入党した、と誤記した。山川振作氏談によったものだが、おりから山川宅を改築中で借家住まいの為、氏はスラスラと記憶のまま答え、これを信じた。逝去後、「山川均」を『朝日人物事典』に執筆する時、念のために夫人に党員証を調べてもらった。9月ではなく7月だった。『事典』に日にちを書きこんだと錯覚しメモを捨ててしまった。また、夫人からもう1通党員証が残っていると伺った。52・1・18左社合成化学支部結成、太田薫、山川均、山川菊栄、清水慎三、木原実、鈴木徹三ら41名が参加しており、この時の党員証だと思い確認しなかった。

また、48年11月の「社会主義政党建成促進運動の発足にあたり」の終わりの部分を小堀が執筆している。しかし、あの『覚書』を山川筆といえるでしょうか、と振作氏は憤慨していた。現物は自宅にあり見ることはできなかった。言い間違えか聞き違いか分からないが、私は「発足にあたり」ではなく、『覚書』と聴き、大原の『雑誌』にそのまま紹介する誤りをおかした。

ここで思い出したが、山川さんと鈴木の関係について話し合った時、「戦前、大森義太郎さんは友人、鈴木さんは同志と父はみなしていた」と振作氏は感じていたそうである。お互いにまだ少年期だったが、そういう話を聞く機会は彼の方が多かったかもしれない。

拝啓

私は去る廿日夜、東北より帰京、通信の件については、出発前に小堀氏より、同氏と談合の結果、私の不在中であっても、会合をすすめていただくことになって居りました。

ところで、私は、廿五日より廿七日まで、予算委員会の近県視察のため、日程が出来て居り、変更をゆるさざるものあり、しかるに廿七日は、張群氏随員並にG・H・Q関係の所要のため、さしくりをすることになりました。

廿八日より九月二日まで、岐阜、京都、大阪等遊説

かやうに日程のきまりましたその後、廿二日に不在中板垣氏代理よりお電話あり、廿三日、同じく代理の方より電話あり、幸ひ在宅いたしました。

座談会の件〔前進〕、通信の件につき、お話がありましたが、右のやうな日程は、すでに動かし難いものでございますから、廿七日以外には、都合のつき兼ねる旨をお答をし、且つ、通知してあるとのことでしたが、未だ、通知を受領してゐない旨をお話をしました。

但し、右の通知は、同日、私が、家を出たあとの午後届きました。

しかるに廿五日朝、別紙のやうな『速達書留』を板垣氏よりいただきました。

これは、刑△所の看守よりも、ゲスな手紙ですが、どうして、かういふづべつを受けなければならぬのでせうか。

私の研究所のものが参りましても、これと同じやうに何かいはれるとかよく申しますので、私はつまらぬことを気にするな、と、はげまして参りましたが、私も、ハガキをみて、アキれました。

彼れ、これ、私も、検討してみたいとおもひますので、廿七日は、出席を差控えたいとおもひます。

私に、かわりなく、すすめていただきたいとおもひます。」

以上の「複写」により、疑問はかなり解消した。

48年春、2年ぶりに山川は藤沢の自宅に戻った。

山川の提唱した民主人民戦線に批判的だったとはいえ、できるだけ鈴木もこれに協力した。二人の仲が悪くなったわけではない。

板垣書店から雑誌『前進』が発行された時、小堀らは同誌を「山川新党」の機関誌にしようとした。しかし、板垣は同誌の性格をより一般的なものにしたかった。

山川あて「書簡」によると、『前進』の座談会への出席、『政経通信』の発行などについて、鈴木は小堀らと話しあっていた。山川が会合へ出席したかどうかは分からないが、話の内容は当然了承していた。

その構想が一挙にくずれた契機は、板垣と鈴木との間の喧嘩が原因である。当時、名前は忘れたが、二、三の方から板垣批判を聞いた覚えがある。いずれにしても、思想的にも人間的にも二人は相いれなかったのだろう。『前進』の座談会どころか、『政経通信』もこれですっとなだ。山川グループが手をひき、急遽伊藤好道が『政経通信』8月1日、49号の編集にあたった。板垣に憤慨し、山川にまでやつ当たりした。何時もの丁重さに比べれば、いささか礼を失した感がある。それにも

まして、個人的感情の軋轢が運動に大きな影響を与えたことは遺憾である。

同年11月「発足にあたり」が発表され、いわゆる山川新党が発足した。しかし、再軍備問題をめぐって同人の意見が対立し、『前進』も50年8月号で廃刊した。

鈴木は『国会証言録』において、敗戦後「山川均さんと私などとの情勢判断に対する考え方の違いだと思うんですけど、山川さんは非常に民主主義、戦後の民主主義というものを大きく見て、それで『今こそ、人民戦線による民主政府を作る段階だ』という考え方を持たれたようんですけど、我々は何かそんなに、そういう民主主義は日本には発達しとらんと、まだそういう条件がないと、まず生活を安定するということが第一だ、まず生活を安定させることが民主主義の基礎になる、と考えた。これが鈴木の人人民戦線論批判である。

鈴木の死去後、長く学長を務めた労働大学の月刊学習誌『まなぶ』は「日本マルクシズムの本流」で堺利彦、山川均、鈴木茂三郎を偲ぶ座談会を2回連載した（123, 4号, 70・12）。出席者は向坂逸郎、木原実ら5名である。そのうち、人民戦線運動に関する向坂氏の発言が興味深い。「あのときにおける鈴木さんは、労農派自身からすら非難をあびながらやられた。あの態度は、堺さん以来の一種のバックボーンつまり山川さんの精神にかえて合致していたと思うんですけどね」。山川さん以上に山川らしかったというこの発言は、印象的であった。

事実、山川の共同戦線論を捨てたと鈴木は述べたが、基本的にはその影響を強く受けながら、新しい道を常に模索し続けた、と云うるだろう。この点については異論もあるから、問題点だけを提起するにとどめたい。

鈴木は晩年、山川を最高の運動指導者と讃え、その委員長時代に、山川を社会主義運動の功労者として表彰し、党葬をもってその逝去を悼んだ<sup>(6)</sup>。（つづく）

（すずき・てつぞう 法政大学名誉教授）

(6) 『大原社会問題研究所雑誌』517号, 2001.12の拙論において、武藤山治らが急先鋒になって、37年の総選挙で社会大衆党へ献金したと述べたが、松尾京大名誉教授から武藤は34年に死去していると注意していただいた。従って、武藤と志を同じくする財界人によるものである。この点、鈴木氏の『国会証言録』は曖昧である。しかし、誤って読んだ責任は私にあり、お詫びして訂正する。

同じく同号において、大庭柯公が釈放されたと断定的に紹介した。「大庭柯公なんかの疑いは、大庭中将の親類だというくらいなんだ。それでも一応調べてみてね。監獄に入れますけど調べて証拠がなければ釈放しているんです。当時、私、無茶だと思ったんですけど、そういうことはやっぱりありません。少なくとも私の知る限りでは」(要約)と語っている。一般論もまじわり、どのようにも解釈しうる。柯公氏は私のウィーク・ポイントであり、念のために記しておく。

更に引用洩れが一ヶ所。渡米前の『大正日日新聞』時代、大山郁夫、長谷川如是閑よりも、河上肇の弟子の古市春彦の影響を受けた。多少、私は社会主義に対する関心を持った。だが、まだ社会主義者にはならなかった。古市は、その後、浅原健三のいわゆる知恵袋になった、と。古市に影響されたことは、私にも初耳だった。